

にちこれにち

禅語の「日是好日」は、文字どおり毎日良い日ということになる。

では毎日良い日とするには、取り戻せない一瞬一瞬の時間を

精一杯生きるといふことなのだろうか。

日日是美日とすれば、毎日美しい日。これをどうとらえようか。

四季の移り変わりの些細な変化を丁寧に感じ毎日を生きていくこと、そして取り入れること。

時間に追われる現代に生きる私たちは、

日本の風土にやしなわれた美意識を忘れがちなかもしれない。

小さな気づきを大切にすること、それが重なれば日々より豊かになるだろう。

3月の展示は、アートと工芸の境界を超えて8人のアーティストに

素材感を十分に生かした作品の出品をお願いした。

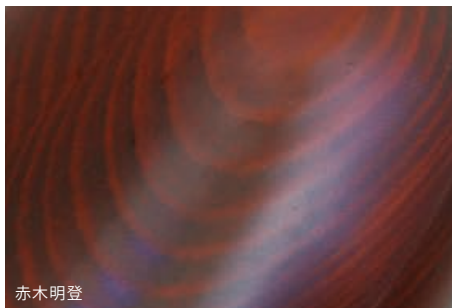
それぞれの美意識よる日日是美日展。

赤木明登、牛島孝、瀧本幹也、田中潤、
林みちよ、樋口明宏、平田五郎、山元規子

2017年3月4日(土) - 3月25日(土)

MA2 Gallery

12:00 - 19:00 火-土(日・月・祝日はご予約制 前日までにご連絡ください)
東京都渋谷区恵比寿 3-3-8 Tel.03-3444-1133 www.ma2gallery.com



赤木明登



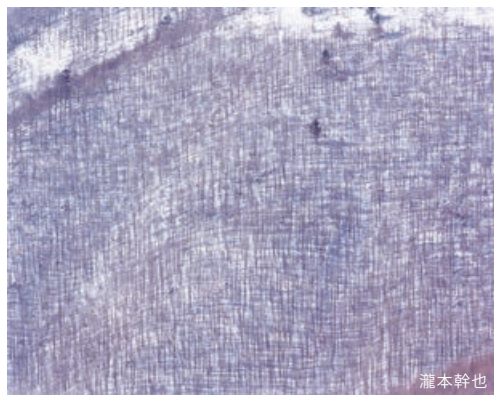
樋口明宏



田中潤



牛島孝



瀧本幹也



山元規子



林みちよ



平田五郎

赤木明登

塗師。出版社編集部の仕事を経て、角偉三郎の漆器に感銘を受け輪島に移住。輪島塗の下地職人・岡本進のもとで修行を積んだ後に独立。里山の自然に囲まれた中で生活し制作する。輪島塗のスタンダード、自然の有り様の姿、神話などの文化、それらを汲みとった中から生まれた形と塗り。漆の原点を求めながら現代の暮らしに生きる作品を探索している。

牛島考

日本画を学び、金沢を拠点に制作。箔を貼った和紙を支持体にして、現代の生活の中から掘り出した断片的なイメージを、線描や墨、岩絵具を使って、揺らぐように漂うように描く。日本独自の技法に乗っ取りながら、軽やかに現代を写し出す作品。日本の伝統的な芸術表現のように、鑑賞者の心が漂う、間・余韻を残した柔軟な表現のあり方を模索。

瀧本幹也

映画、広告そしてアートと幅広くアプローチしながら一目で瀧本作品と分かる洗練された大胆な構図をもつ作品を制作。人工物でも自然物でも、対象に近づきじっくり向かいあった中で情報量を淘汰。撮影のベストポジションを見つけ、そのものが持つフォームや色をシンプルに浮かびあがらせる。それは常に新鮮な驚きと物の見え方を提示している。

田中潤

田中潤は、鍛造と鍛金をすることによって鉄の素材の持つ強さと繊細さが共存する作品を作り出す。建築空間に配置するエクステリアから手に収まるオブジェまで大きさも多様である。展示作品の小さな花器は、錆をいかしたり、釉薬をかけたり陶器のようである。丹念に叩くことで鉄の金属感を持ちながら温かみを持たせる作品が田中の持ち味である。

林みちよ

何層にも重ねられた銀彩の林みちよの作品は、手びねりならではの曲線からできあがる。線の美しさを自由に操り植物に形づけられた彫刻のような器。そして時間を重ねるごとに、銀彩は燻し銀に変わっていく。その様は、まるで枯れゆく姿を愛でるといふ日本の美意識を喚起させる。

樋口明宏

彫刻科だった学生時代、石や木など自然の物と向き合い素材と表現の関係を強く意識。そこから、文化的背景を持つ仏像やアニメフィギュア、蛾の標本や動物の剥製型を用いた作品を制作するようになる。素材の持つ意味や印象をベースに、そこに突拍子もないような要素を見事に融合するようにプラスして、歴史と現代、自然と人間の関わりをユーモラスに表現している。

平田五郎

半透明の蠟や硝子で出来た、内側を持つ家や箱、塔。歩行した先々の土地の歴史や神話をひろいあげ、その場にある石や貝などから彫刻をつくるダイナミックなフィールドワーク。自然の素材と身体行為を通して向き合い、その対話から自己の内面に深く降りてゆく作品を制作。自然との関わりから人間の内なる意識への誘いは、大きな流れの中で個を思う東洋的な思想とも近い。

山元規子

山元規子は、磁土の素材に出会ったのは、社会人になってからである。薄くて硬質な卵の殻のような断片が幾重にも重なり、薔薇のような花をイメージさせたり、ある時は増殖する生物のようにも感じさせる。硬質でありながら和紙のような質を伴い、儚さを表現されている陶作品。